

長崎の林業

小曾根星堂書



小学生向け森林学習会の様子（長崎南部森林組合）

8

目次

- 林政だより 農林水産祭参加 全国林業経営推奨行事
祝！ 農林水産大臣賞受賞 長崎南部森林組合 大村支所 … 2～3
- 特集記事 波佐見町 楠本農園 森の名人が育てる究極の原木椎茸 … 4～5
- 林業普及だより ハチに注意！ …………… 6
- 地方だより・島原 山地防災ヘルパー協会島原支部研修会を開催 …………… 7
- 地方だより・五島 ツバキの実の収穫に向けてツバキの育成マニュアルよりー … 8
- 林業団体情報 西海市 ふるさと納税に木製ツールを …………… 9
- センターだより 対馬の広葉樹伐採跡の植生（シカの嗜好性が低い植物） …… 10
- ながさき県民の森 フォトコンテスト2020 募集中！ …………… 11
- 長崎の山：鳥甲岳（とりかぶとだけ）769m（大村市） …………… 12



2020
No.779

木づかい推進で地球温暖化を防止しよう！

FREE

ご自由にお持ち下さい。

「長崎の林業」は、ながさき森林環境税により発行しています。
「長崎県庁」のホームページ「広報」→「県の発行物」からもご覧いただけます。

林政だより

農林水産祭参加 全国林業経営推奨行事
祝! 農林水産大臣賞受賞
長崎南部森林組合 大村支所



長崎南部森林組合 大村支所の皆さん

全国林業経営推奨行事の概要

令和2年度「全国林業経営推奨行事」において、長崎南部森林組合大村支所が見事、農林水産大臣賞を受賞しました。

この行事は、昭和37年から公益社団法人大日本山林会が主催し、森林の適正な管理及び林業の技術・経営の改善に努め、森林の有する多面的機能の発揮及び林業の持続的かつ健全な発展に寄与している「森林の管理経営体」を表彰するものです。

全国の都道府県知事が推薦した優良林業経営体を、同法人が組織する学識経験者からなる審査委員会が審査し、今年是全国26件の中から、農林水産大臣賞に長崎南部森林組合大村支所の他7件、林野庁長官賞に16件、大日本山林会会長賞に2件の受賞となりました。

長崎南部森林組合大村支所の取組 【施業の集約化】

長崎南部森林組合大村支所では、前身であ

る大村市森林組合の頃から個々の森林所有者と強い信頼関係を築くことで、隣接する複数の森林所有者の森林をとりまとめて路網整備や間伐等の森林施業を一体的に実施する「施業の集約化」にいち早く取り組みました。

現行制度での私有林の森林整備計画にあたる森林経営計画は、大村市内の私有林人工林のほぼ全域92%について作成済みで、平成25年からは大村市有林の経営管理を受託して、地域全体の森林管理を進めています。



集約化された森林での搬出作業

【コスト縮減・省力化】

平成5年には県内で初めて高性能林業機械を導入し、列状間伐を全国に先駆けて実施するなど、コスト縮減、省力化に取り組んでいます。最近では、成熟した森林資源の循環利用を図るため、平成28年から「主伐・再造林一貫システム」に取り組むとともに、環境保全を主目的とした針広混交林へ誘導するため、人工林をモザイク状に伐採し、その跡地は天然更新により天然林化を図る更新伐にも積極的に取り組んでいます。

また、長崎南部森林組合は本県で最初に「意欲と能力のある林業経営体」の登録を受けるなど、本県の林業界を牽引しています。

※列状間伐：伐採する木を選ぶのではなく、一定の列(幅)の木を全て伐採する間伐方法

※主伐再造林一貫システム：伐採・地拵え・植栽を連携して同時に実行する低コストの造林技術



間伐作業の様子



コスト縮減に向けた全体打合せ



主伐地での造材作業

【後継者育成への取組】

平成14年から、毎年、地元小学5年生を対象に林業体験等を通じた森林学習を開催するとともに、イベントへ積極的に参加し、消費者と交流するなど森林・林業への関心向上につながる取組を行っています。

このような取り組みが評価され、今回、栄えある「農林水産大臣賞」を授与される運びとなりました。



小学生向け森林学習会

過去の受賞者

なお、本県の過去の農林水産大臣賞受賞者は、以下の2名です。

平成8年度 高月久雄氏(波佐見町)

平成28年度 森瀬忠明氏(雲仙市国見町)

(林政課普及指導班)



【特集記事】

波佐見町 ▶ 楠本農園

森の名人が育てる究極の原木椎茸

日本の森の名手・名人 100 人に認定された楠本和義くすもとかずよしさんと奥様の初代はつよさん

「陶・農」融合のまち「波佐見町」

長崎県のほぼ中央部に位置する波佐見町。約 400 年続く陶芸のまちとして知られています。江戸後期、染付の生産量が日本一となり、「くらわんか椀」と呼ばれた茶碗や皿は日常食器として現在の波佐見焼へと進化。日本の食文化を支える器として今も様々な世代に愛されています。また県内初の農村総合整備モデル事業を取り入れた米の産地でもあり、農業の近代化にも尽力しています。そんな波佐見町が力を入れるのが「グリーンクラフトツーリズム」。地域に息づく暮らしや自然体験を楽しみに、県内外から沢山の観光客が訪れます。そこで一役買っていたのが楠本農園の楠本和義さんと奥様の初代さん。長年に亘り波佐見町を盛り上げてきた楠本さんご夫婦に話を伺いました。

お茶農家からの転身

波佐見町永尾郷木場山地区。古き良き里山の原風景を思わせる山あいの一軒家が楠本さんの拠点です。元々は代々続くお茶農家。若い頃から栽培を手伝い、農業高校を卒業後は父と共に、八女のお茶農家への視察

研修を重ねました。しかしそこで、一大産地と小さな山間地の規模の違いを強く感じた楠本さん。思い切ってお茶栽培をやめ、この地に合った山の資源を活かす品目の栽培に切り替える決意をしました。そこで着目したのが、原木椎茸の促成栽培。20 代でお茶農家からの転身を試み、原木椎茸栽培の取り組みを始めました。しかし手元にあった原木はすぐに底をつき、毎年各地から取り寄せるコストがネックとなりました。そこで豊富にあった自分の山を利用し、原木の植栽に踏み切ったのです。楠本農園の生椎茸は、美味しさは勿論のこと、当時は珍しさもあり、予想以上の高値で取引されました。

九州でも生椎茸の栽培を

24、5 歳の頃から 3 年程、生椎茸栽培の技術を学ぶため、熊本を始めとし本州各地へと視察に出ます。当時、九州産椎茸はほとんどを乾燥させて販売していました。一方、本州では、良質な生椎茸を多く販売しており、そこで「九州の人は売り方が下手だ。」と言われたそうです。そんな中出会った熊本県の熱心な「生椎茸研究会」に入会し研究を重ねた結果、できた椎茸は市場でも大変な人

気となりました。30代で人を雇い、本格的な栽培を始めた頃、標高200mほどある土地を活用した栽培方法によっては、春と秋だけでなく夏でも発生するのではと考え、そこから新たな挑戦が始まりました。

森のスペシャリストとして

当時長崎では着手されていなかった原木椎茸の不時栽培（1年を通して収穫できる栽培方法）に踏み出した楠本さん。独自の研究により、冷却装置のついた浸水装置や冷たい山水を散布出来る冷水機、冷房室での管理により、種菌が秋を感じて自ら発生する仕組みを生み出しました。



ほだ木の浸水装置 重石を乗せ冷水に沈める



(左) 山から引いた冷水を散水するハウス
(右) 仮伏せ場 おが菌を植菌後、蠟で蓋をする

これまで秋と春にしか出来なかった生椎茸を、一年を通して収穫出来るようにし、また通常2年かかる栽培期間を1年に短縮するなど今までにない新しい技術を確立したのです。また、原木椎茸の特徴である豊かな味わいと独特の食感を沢山の人に伝えたいと収穫体験にも挑戦。初代さんを筆頭に地域の婦人部の方々も協力し、椎茸料理を振る舞いました。体験を通じて田舎と山との関わりを知ってもらうと同時に、その山の恵みを循環させることで田舎を守るという生産者と消費者の連携プレーを築き上げた楠本さんの活動は、平成17年

度「日本の森の名手・名人100人」に認定されました。農林業の可能性を広げ、多い時は年間20tあまりを出荷する椎茸産地を構築した取り組みが、日本の林業を支える貴重な技術として認められたのです。



(左) 椎茸の収穫体験の様子
(右) 子ども達に森の循環の話をする楠本さん

農業高校時代の恩師の「人のことを真似るのではなく、人から真似される取り組みを」という言葉を胸に、真摯に挑戦を続けてきた楠本さん。自然と共に生き、森を守り育てる名人として、これからの林業を支える人に伝えたいことは、「山は生命の源であると常に考え、目的をもって努力を積み重ねて欲しい。やるべきことが分かれば重労働も苦ではなくなる。」と話されていました。

全国から愛される椎茸農家へ

ご夫婦の愛情と、木場山の森の空気を吸い込んだ原木椎茸は大変力強く、深く濃い味わいと弾力のある菌ごたえが特徴で、一度食べたら忘れられない味。長年東京の高級料亭や大阪の焼き鳥屋で愛され続けた貫禄ある味わいには、名人の誇りと想いが詰まっています。その生の椎茸と竹の香りを楽しんでもらおうと、知り合いの竹細工店に頼んで特製の青竹籠を作り、籠いっぱいに椎茸を詰めてお歳暮として販売したところ、都会の人たちに大変な人気となったそう。「最近は規模を縮小しているよ。」と言われますが、ずっしりと手のひらに感じる重みは、ひとえに努力と研究を重ねた楠本さんの宝であり、同時に、後世へと受け継ぐべき山を活かす知恵と技の賜物だと感じました。

(NPO 法人地域循環研究所)

林業普及だより

ハチに注意！



アレルゲン名	測定結果			
	U _a /mL	クラス	0	1
ミツバチ	0.10未満	0	●●	
スズメバチ	0.10未満	0	●●	
アシナガバチ	0.10未満	0	●●	

自然の中で営まれる林業の現場では、ハチに遭遇する機会が極めて多いため、私たち林業関係者は、ハチの防御法と、刺された場合の対処法を知っておく必要があります。知識と予防により、自分の身を守ることは可能です。

ハチの習性を知ろう

厚生労働省の調査によると、日本ではハチ刺されによるアナフィラキシーショックにより1年間に10人以上が亡くなっており、その多くは40歳以上の男性でした。

アレルギー反応が短時間で全身に激しく現れることをアナフィラキシーといいます。

このアナフィラキシーによって、血圧の低下や意識障害などを引き起こし、場合によっては生命を脅かす危険な状態になることもあります。この生命に危険な状態をアナフィラキシーショックといいます。

アナフィラキシーの原因は食べ物がもっとも多く、続いてハチなどの昆虫となっています。ハチは巣を守るために外敵に向かっていく習性があります。人を刺す習性があるのはミツバチ、スズメバチ、アシナガバチの主に3種類です。ハチは黒っぽい色に向かって攻撃したり、甘い匂いに誘われたりする習性があります。また、顔や首、腕、足など、露出した部分が真っ先にねらわれるので、なるべく肌を覆う服装を心がけましょう。

ハチに刺されないためには、「ハチに近づかない」、「巣に近づかない」、「ハチや巣に触れない」のハチ3つを守りましょう。

ハチの被害は夏から秋頃にかけて多く、ハチ刺されによる患者数は8月がピークと言われており、今からの季節が要注意となります。

ハチの特性を知ろう

ハチに刺された場合に、ハチ毒にアレルギーがなければ、刺された箇所に軽い痛みやかゆみ、腫れなどが起こり、数日程度で消えていきます。

しかし、ハチ毒にアレルギーがあると、全身のじんましんなどの皮膚症状や嘔吐、浮腫、呼吸困難などが起こるアナフィラキシーを引き起こすといわれています。また、意識障害や急な血圧低下によるアナフィラキシーショックを起こす場合があります、命に危険がおよぶ可能性があります。

この、アレルギーがあるかどうかは血液検査等で分かります。アレルギーがある場合やアナフィラキシーのリスクがある場合は、アドレナリン自己注射薬（アナフィラキシー補助治療剤）を携帯すると安心です。



写真は血液検査の状況です。上記表のとおり個人の特徴が分かり、表の被検査者はアレルギーが無いことが分かりました。自分の身は自身で守りましょう。

(県北振興局林業課)



地方だより

山地防災ヘルパー協会島原支部研修会を開催



6月19日（金）、島原市南千本木町垂木台地にて山地防災ヘルパー協会島原支部の研修会が行われ、約50人が参加しました。

本県の山地防災ヘルパー制度は、山地防災に対する的確で早急な対応を推進し、地域に密着した山地災害の情報収集能力の強化などを目的に、1997年に創設されました。

ヘルパーは会員制で治山事業の経験者を知事が認定します。主な活動は、山地災害や治山施設の被害状況の把握、山地災害を受けた箇所での2次災害の防止のための監視などの活動を行っています。

島原支部ではヘルパー活動に役立てていただくため、年に1回研修会を開き、講義及び実習を行っています。

今年は新型コロナウイルスの影響もあり、研修会の開催が危ぶまれましたが、マスク着用や体温計測、アルコール消毒などの感染対策のうえ、室内の換気を行いながらの実施となりました。

研修会では、はじめにヘルパー制度、島原管内の治山事業や保安林制度、講義後の実習で使用する草刈り機の取扱い方について、振興局林務課が講義を行いました。次に講義後の実習では、小場会長の号令のもと垂木台地の除草作業を参加者全員で行いました。霧で視界が悪い中、安全を心がけて作業を行い、

短時間で見事綺麗になりました。

本研修は、CPDS継続学習プログラムとして認定されており、受講者へ受講証明書を授与し、研修会を終了しました。

今回の研修会は、日頃の活動に活かすことはもちろん、防災ヘルパー同士の交流や意見交換の場としても、良い機会となったのではないかと思います。



講義の様子



除草作業状況

（島原振興局 林務課）

地方だより

ツバキの実の収穫に向けて —ツバキの育成マニュアルより—

はじめに

「年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず」これは昔の中国の詩人、劉希夷が残した詩の一説です。

日本有数のツバキの自生地である五島では、毎年花が咲く2月頃「五島椿まつり」が開催されてきました。今年はそれに加えて「2020 国際ツバキ会議五島大会」と「第30回全国椿サミット五島大会」が開催される予定でしたが新型コロナウイルスの影響で中止となりました。詩の元の意味とは少し異なりますが、人の世は毎年同じようには過ごせないものです。

しかし、ツバキは毎年花を咲かせて実をつけ、ツバキ油という恵みをもたらしてくれます。今回は、県が出している「ツバキの育成マニュアル」の内容を主に、ツバキについて改めてご紹介します。

五島のツバキの特徴

五島のツバキは遺伝的に県本土とは異なり、独特のものと考えられています。

また図鑑では種子の数は1～3個、多くとも4個とされていますが、五島のツバキは種子が5～9個入っている実が多いのが特徴です。(写真1)



写真1 五島のツバキの実と種子

収穫前のツバキの実の中では

ツバキの実は4月から大きくなり始め、7月頃に成長が止まります。しかし、実の中の

種子は、見た目は大きいものの中身(胚乳)はまだ充実しておらず、油も少ない状態です。その後、胚乳は種子の中で徐々に油を溜めて大きくなり、9月頃に成長が止まります。(写真2)

この時期は油も多く、収穫適期と言えますが、実際は個体によって時期が細かく異なるため収穫には注意が必要です。



写真2 収穫時期別の種子と胚乳

収穫時の注意

ツバキの実を収穫する時には、転落事故に充分注意する必要があります。「1メートルは一命とる」とも言われるように、少しの高さでも油断しないようにしてください。

終わりに

今回ご紹介した内容の多くは「ツバキの育成マニュアル」に書いてあります。必要な方は五島振興局林務課か、農林技術開発センターまでお問合せください。



【お問い合わせ先】

○五島振興局 林務課

TEL : 0959-72-2094

○農林技術開発センター 森林研究部門

TEL : 0957-26-4293

(五島振興局林務課)

林業団体情報

西海市 ふるさと納税に木製スツールを

西海市には約4,900haの人工林があります。

西海市農林課では、この森林資源を活かし林業の成長産業化を図るため戦略プランを作成中ですが、森林の必要性や木材の利用についての周知が必要と考えていました。

そこで、西海市の材を活用した新たな取り組みができないか検討した結果、ふるさと納税の返礼品として木製スツールが採用されました。

西海市の材の活用を第一に！

西海市には長崎南部森林組合 西海製材所があり、西海市で伐採された丸太はここで加工されています。

今回、ふるさと納税の返礼品を決めるにあたり、西海市産材であることが条件であるため、元々西海製材所と付き合いのあった吉永製作所に相談した結果、西海市の材を使用したスツールをご提案いただきました。2019年にグッドデザイン賞を受賞した作品です。

吉永製作所は、長崎市外海町にある家具工房です。地域の材を使用することに強いこだわりを持たれており、これまでも、西海市の材も使用されていました。

返礼品は西海市産のヒノキを使用したスツールで、重ねて収納ができます。シンプルでどんな部屋にもマッチする、飽きのこないデザインになっています。

西海市のヒノキは、成長が遅いため、きめが細かく、やや赤みがかった美しい肌合いが特徴であると言われています。ぜひ、その風合いを感じていただけたらと思います。



返礼品につきましては、「ふるさとチョイス」または「楽天ふるさと納税」、「ANA のふるさと納税」にてご確認ください。

西海市として、今回の取り組みは、新しいチャレンジになりますが、木材利用推進のきっかけになればと考えております。

また、今後はこのスツールを手始めに、返礼品にまな板や木炭等、森林資源を活用したさまざまな商品を増やし「森のコーナー」を作っていくことも検討中です。

これにより、森林の循環的な利用だけでなく、林業や木材加工を生業とする方々の所得向上につなげていきたいと考えております。



ふるさと納税については
こちらから（市HP） →



（西海市 農林課）

センターだより

対馬の広葉樹伐採跡の植生（シカの嗜好性が低い植物）

対馬における広葉樹伐採

対馬では、シイタケ原木や製紙用チップを生産するため広葉樹の伐採が盛んに行われています。これまでの広葉樹伐採後は、新たに植栽しなくても萌芽により更新ができていましたが、近年、伐採跡地では、シカが萌芽を食べるため、更新できず、裸地化が進み、土砂災害が起きることが懸念されています。広葉樹伐採跡地におけるシカ被害対策は、補助事業による植栽に併せて、防鹿ネットを設置する以外、殆ど行われていません。そこで、広葉樹伐採跡地におけるシカ対策を検討するため広葉樹伐採跡へ防鹿ネットを設置して、植生を調査しました。

試験地の概要

今回の試験地は、対馬市豊玉町の製紙用チップ生産のために平成29年に伐採された広葉樹伐採跡です。その場所に4か所、平成31年2月に防鹿ネットを張りました。平成29年のシカの生息頭数調査では、試験地周辺にシカが60頭/km²近く生息していると推定されています（環境に影響を与えないとされる適正頭数3～5頭/km²）。今回、試験地に設置した自動撮影カメラにもシカが頻りに撮影されており、依然として多くのシカが生息していると考えられます。

広葉樹伐採跡の植生

平成31年10月にネット有の場所と無の

表1 防鹿ネットの有無による試験区内で確認された種数

防鹿ネットの設置	木本類 (種)	草本類 (種)
有	22	6
無	12	3

表2 防鹿ネットの無の試験区で確認された主な木本と草本

木本	クロキ、スダジイ、ヤブツバキ、ナツフジ、イヌザンショウ、アカメガシワ、シロダモ等
草本	スゲ、オオアレチノギク、ダンドボロギク、ススキ

場所、各々に、10m×10mの方形の試験区を設定し、植生を調査しました。ネット有の試験区では木本類が22種、草本類が6種（4試験区の平均）、ネット無の試験区では木本類が12種、草本類が3種（2試験区の平均）確認されました（表1）。今回の結果から、広葉樹伐採跡においては、シカの食害が、森林が更新していくときの植物の種類に影響を与えることが明らかになりました。ただし、ネット無の試験地においても種類は少ないものの、更新は進んでいました（写真1、表2）。特に、スダジイの萌芽更新がネットの有無に関係なく、多く確認されました（写真1）。今回のネット無の試験区では、シカの嗜好性が低い植物が残り、植生が回復していたと考えられます（表2）。このことは、伐採する場所に生育する樹種等を事前に把握しておくことで、伐採後の更新が可能であるか判断できると考えられます。

また、既に裸地化している更新不良地などに、嗜好性が低い植物を利用できないか検討していきます。今後もスギ・ヒノキ等の人工林だけでなく広葉樹林においても、シカ被害対策がすすむよう取り組んでいきます。



防鹿ネット内外の植生の状況（2019年10月）
（写真で確認できるものの殆どがスダジイによる萌芽）

ながさき県民の森 フォトコンテスト2020 募集中!

現在長崎県民の森では、「ながさき県民の森フォトコンテスト 2020」の写真を募集しております。

テーマは「ながさき県民の森」内の四季折々の自然風景や生き物、家族や団体に訪れた人たちが楽しんでいる状況や思い出の一コマで令和元年10月1日から令和2年9月30日までに撮影された写真が対象です。応募票（タイトル、撮影年月日、撮影場所、氏名、住所、電話番号）を写真（A4、四つ切、四つ切ワイド）の裏面に添付の上9月30日（水）までに長崎県民の森に持参または郵送をしてください。応募について詳しく知りたい方は長崎県民の森のHP等でご確認ください。

長崎県民の森の美しい風景や人と自然のふれあいを是非お手持ちのカメラに収めてみてはいかがでしょうか。たくさんの方のご応募、お待ちしております！



送付先

〒851-2421 長崎市神浦北大中尾町 693-2
 長崎県民の森事務所（森林館）
 TEL : 0959-24-0181

伊万里木材市況

【ヒノキ】 市売りは中止

令和2年7月現在

長さ	径級 cm	等級	高値 (円/㎡)	現在出荷量	現在引合	需要見通
4m	16 ~ 18	直	15,000	少ない	多い	普通
	16 ~ 18	小曲り	13,000	少ない	多い	普通
	20 ~ 22	直	15,000	少ない	多い	普通
	20 ~ 22	小曲り	13,000	少ない	多い	普通

【スギ】

令和2年7月現在

長さ	径級 cm	等級	高値 (円/㎡)	現在出荷量	現在引合	需要見通
4m	16 ~ 22	直	13,300	少ない	多い	多い
	16 ~ 22	小曲り	12,000	少ない	多い	多い
	24 ~ 26	直	13,300	少ない	多い	多い
	24 ~ 26	小曲り	12,000	少ない	多い	多い

※情報・お問い合わせは、伊万里木材市場 電話 0955-20-2183 まで

とりかぶとだけ
長崎の山: 鳥甲岳769m (大村市)



黒木バス停付近からの鳥甲岳

鳥甲岳は多良山系の大村市側黒木溪谷に坐する屋根のような形状の小山です。少なくとも国土地理院の2万5千分の1地形図に、その山名を見ることはできません。南川内集落を起点とする登山道は、スギ、次いでヒノキの人工林を縫う急な登りで始まります。小一時間一汗かいて稜線にたどり着くと植生はアカガシを主とする天然林に一変。木々の蒸散で一段と涼しさを増した風に火照った体をさましながら、平坦な尾根道をしばらく歩くと頂上に至ります。初心者向きの、気軽なハイキングコースといったところですが、名だたる名峰を登りつくしたベテランが、足を向けたくなる玄人好みの山とも言えます。そのような方が少なからずいることは、しっかりと踏み固められた登山道からも見て取れます。

大きな鳥居をくぐったところを起点とする登山道は、そのまま頂上付近に鎮座する摩利支天宮に至る参道ともいえます。支障木の処理や周辺人工林の間伐が思いのほか行き届いているのは、そのせいでしょうか。この地を治めた戦国大名「大村純忠」は、かつてここに祭られていた戦の神の木像に加護を祈り、大村湾一円に領土を広げますが、木像は後にキリシタンとなった純忠自らの手により焼き払われたと言われ、現存しません。

この山深い地にもかつてまぎれもなく戦国の世があったことを物語ります。

記録によると元禄7年(1694年)阿波の国の炭焼き28名が大村にやってきて、まだ原生林に覆われていた南川内一帯で炭を焼くことを願い出て許され、同12年には開墾、開



「摩利支天宮の鳥居」と「大名杉」

田を15年には永住を許されたとあります。純忠の時代より150年余り後のことです。高い石垣が印象的な段々畑や棚田は、その末裔たちの手で現在でもしっかりと耕作されています。

近くには、日本の巨木100選に選定された「大名杉」(幹周4.9m、樹高47m)をはじめとする杉の大木群落450本と「萱瀬杉」を見ることができます。県内最古の人工林で樹齢は260年ほどと推定されていることから1760年ごろ植えられたということになります。南川内が開かれた60年余り後、孫か曾孫の世代たちによって植えられたのでしょう。

巨木の森を歩いていて、古い窯跡を目にしました。こちらは昭和の初期に考案されたいわゆる改良窯でしたので、さらに幾世代も後の人の手によるものです。

一帯では、戦国時代から現在に至るまでそれぞれの時代を生きた人々の営みが、地層の断面のように顔をのぞかせています。現代人の営みはとかく目の前のことばかりに終始しがちですが、林業に携わる私たちは古人から託されたかけがえのないものを未来人へと引き継ぐ仕事をしているという誇りを胸に、山や森に向き合いたいものです。

(NPO法人地域循環研究所)

長崎の林業 8月号 第779号

編集・発行 長崎県林政課

住所: 長崎県長崎市尾上町3番1号

電話: 095-895-2988

ファクシミリ: 095-895-2596

メールアドレス:

s07090@pref.nagasaki.lg.jp